

# 資 料

1. 日本特殊教育学会第38回大会及び第39回大会自主シンポジウム報告
  
2. コミュニケーション障害研究における「関係論」をめぐる諸問題  
—言語障害教育の分野を中心として—  
(牧野泰美・松村勘由, 2001, 国立特殊教育総合研究所研究紀要, 28, 67-75.)

# 日本特殊教育学会第38回大会及び第39回大会自主シンポジウム報告

## 1. はじめに

本研究に関連した企画として、日本特殊教育学会第38回大会及び第39回大会において自主シンポジウムを行った。第38回大会では、『「関係」への援助と言語指導(その1) -臨床家が大切にしている「関係」とは-』、第39回大会では引き続き第2弾として、『「関係」への援助と言語指導(その2) -コミュニケーション障害研究・実践における「関係」の意味を探る-』をテーマに掲げ、本研究の主旨にもある、「関係」への接近を議論を通して行おうと試みた。ここでは、この2回のシンポジウムの概要を報告する。

## 2. 企画趣旨 -メインテーマ『「関係」への援助と言語指導』について-

コミュニケーションの成立を送り手の内面世界を受け手の内面において構成すること、つまりその時々のもとの内面世界の共有とすれば、コミュニケーション障害は、発音、流暢性、語彙、構文力等々の(言語)能力の不十分さのみに起因するのではなく、共有がなされにくい関係、すなわち関係の障害と捉えることが可能である。このような観点に立てば、コミュニケーション障害への援助の一つの視点は、教師等の関わり手が子どもと通じにくい、つき合いにくいと感じるとき、それを払拭し、さらには通じやすい、つき合いやすい関係となるように援助するということになる。もちろん、一人の関わり手だけでなく、子どもと周囲の事物・事象との関係を深め、広げていくことも重要になる。すなわちコミュニケーション障害は、子どもと周囲の事物・事象との関係の障害であると考えることが可能であり、コミュニケーション障害への援助は、子どもと周囲の事物・事象を内面的に結びつけていくこと、共有を図っていくこと、すなわち「関係」への援助であると言える。しかし、こうした観点からのコミュニケーション障害への実践的、研究的アプローチの展開においては、現時点では「関係」をどのように捉えるのか、といった基本的な枠組み自体が確立されておらず、それを模索しつつ行われているのが現状である。企画者らは、こうした「関係」についての研究パラダイムの確立を目指すとともに、「関係」への援助が、個の(言語)能力にどのようにつながるのかを究明していきたいと考えている。このようなことから、本シンポジウムは『「関係」への援助と言語指導』をメインテーマとし、「関係」を援助するということの実践的な討論と、個の(言語)能力への貢献を探ることを目的に企画された。

## 3. 第38回大会報告

### サブテーマ

臨床家が大切にしている「関係」とは

### 企画・司会

牧野泰美(国立特殊教育総合研究所)

松村勘由(国立特殊教育総合研究所)

### 話題提供者

万年康男(上田市立北小学校)

青山新吾(備前市立伊部小学校)

佐々木人志(島根県立浜田養護学校)

### 指定討論者

堀 彰人(千葉県特殊教育センター)

### 3-1. 目的

先の企画主旨の中で、コミュニケーション障害及び「関係」への援助の意味合いと、本企画の目的について触れたが、子どもの言語・コミュニケーションに関わる領域の中で、いわゆる関係を大切にすることの重要性は、従来より多くの研究者や臨床家によって語られてきている。しかし、それぞれに語られる関係の意味は異なったものである可能性が高い。上述の「関係」への援助の観点に立てば、「関係」を深め、広げていくこと自体がいわゆるコミュニケーション指導であるとも考えられよう。そこで、今回は企画の1回目として、各々の臨床家が子どもとの関わりの中で大切にしている「関係」について取り上げ、上述の企画目的への接近に向けての足がかりを得ることとした。

### 3-2. 話題提供の概要

企画趣旨説明の後、まず、企画者(牧野)より近年のコミュニケーション障害研究における関係論的接近に関して、1) ①子どもの側の「能力」偏重への反省、②個の発達は周囲との「関係」を無視しては論じ得ないという発達観、が根底に見られること、2) コミュニケーションの成立に関して、情動共有の側面を強調していること、3) ①子どもと関わり手の二者関係や、②子どもと事物・事象との関係、に研究の視点が置かれていること、4) ①研究パラダイムと方法論の確立、②「関係」と個の「能力」の関連性の検討、が課題であること、等の概観を報告した。その後3名の話題提供者による報告が行われた。概要は以下の通りである。

1) 万年康男氏:「ことばの教室」での子どもと指導者との関係は、まず、いわゆるラポートづけとして「個人的関

係」を作ってから、その子どもに必要な「言語指導」に入るとするのが一般的である。言語指導においては、言語に関する狭義の専門性を挟んだ関係となる（「言語指導的關係」）。しかし、そのようなあり方に対して、通級する子どもの多様化などもあり、より「個人的關係」を深めるといふ関わりもありようも注目されている。このような「個人的關係」では、子どもも指導者も自分らしく存在することができ、双方ともに普段は出せない自分が出せたりして、充実した時間を過ごすことができる。そこでは言語に関する主訴は一時保留されたりする。ただし、結果的に成果が子どもに表れることもある。このような關係は、客観的評価の土俵にのりにくいという欠点がある。目的的活動になりやすく、しかも「個人的關係」は「今ここ」での充実が大切にされるため、般化、評価などが課題となる。実際の臨床現場では、「言語指導的關係」と「個人的關係」のバランスを工夫している。前者は意図的な關係であり、後者は結果として生じた關係であるとも言える。いわゆる言語症状としての成果のいかんにかかわらず、喜んで通級している子どもや保護者の存在は、後者によって得られるもの大きさを感じさせる。

2) 青山新吾氏：自閉症のAとの関わりにおけるエピソードから考えてみたい。ある行事での出来事。Aが「アイスクリーム買って」と騒いだ時に、あるボランティアが「終わったら買ってもらおうね」等と言って対応していたが収まらない。青山はAが「アイスクリーム買ってと言いたい」気持ちと、「アイスクリームを買って欲しい」気持ちは違うと感じ、「Aはお姉さんだろ、お姉さんはそんなこと言わないだよ」等と語りかけ、Aも「お姉さん」等と呟きながら落ち着いた。それ以後Aと会うとすぐ「青山先生」と近づいてくる關係になった。その後のあるキャンプ。初めての場所が苦手なAは「帰る」と言って騒ぐ。ボランティアの説得にも耳を貸さなかったが、青山が近づき目が合うと「ごめんなさい」を繰り返す。青山は、Aは騒いではいけないと思いながらどうすればいいかわからないのだと感じ、その気持ちに沿った対応をしたところ、Aは落ち着いて行事に参加した。その後の別の場面。あるボランティアが「Aちゃんはお姉さんなんだよね」と言ったところ、突然正座して話を聞き出した。

このエピソードでは、Aは青山との「關係」の中で見る必要がある。「あの子は～だ」のように「個」だけを見るのではなく、常に多くの關係性の中で見るのが大切だろう。また、子どもの能力の状態にさほどの変化がないとしても、關係が変化することで暮らしやすくなることもあると考える。適当な表現が見つからないが、「強力な人間關係」の中では、個の能力を引き出したり、個を存在しやすくさせる可能性があると思われる。

3) 佐々木人志氏：知的障害養護学校における自閉症の中学部生徒Bとの関わりを経験から考えたい。学校から飛び出してしまう、集団活動に参加しない等から、Bは校内では「大変な子」というイメージが定着していた。学校内での枠組みに適應しないBとの関わりに苦しさを感じた。教師の言う通りにはなかなか動いてくれない。特に集団内で逸脱した行動を示すときなどは、その対応に対する同僚の視線が気になり、より関わりにくさ、居心地の悪さを感じた。そこで一緒に校外に出てみることにした。校外を一緒に散歩することにして、校外へ飛び出すBに寄り添ってみようと考えた。スーパーでの買い物も、近くの大学の研究室に立ち寄ることも日常となった。そこではスタッフがBをそのまま受け入れてくれ、Bも落ちついて過ごせた。日々校外歩行を続けているうち、研究室に立ち寄ったときなど、いつの間にかBの要求が底なしに続く感じは消え失せ、佐々木の指示にも従えるようになった。Bにとっても佐々木にとっても、学校という制約された中での關係から、外に出たことで、お互いが「楽」でいられる關係となった。Bにとってはありのままの姿が認めてもらえる時空となった。「楽な關係」、「安心できる關係」がBを支えたと考えられ、そのような關係が成立しにくい時、環境を変えることも一方法である。

### 3-3. 討論（印象も含めて）

指定討論者の堀彰人氏からの、従来より言語臨床の場では關係が重視され、「治療的關係」等と言われてきていたこと、及び「治療的關係」に関するいわゆる田口（恒夫）語録の紹介、そして各話題提供者が大切にしている「關係」はそれとどのように違うのかといった投げかけから討論が始められた。話題提供の中で語られた「個人的關係」、「強力な人間關係」、「楽な（安心できる）關係」といった「關係」について、それぞれ別のことばでの説明がなされたが、共通すると考えられるのは、「通じ合えている、繋がっている等の実感が持てる關係」ということであろう。

このことは、本企画がコミュニケーション障害すなわち「通じない、通じにくいという關係」への援助を一つの柱としていることからすれば、当然の帰着と考えられよう。その後フロアも交えて討論が行われたが、話題の中心が「關係」の捉えから、子どものそのままを認めるということと指導的働きかけのバランス、学校教育における関わりもありようにまで分散した印象がある。企画者の力量不足は否めないが、このシンポジウムの参加者の多くは、日々子どもと関わる実践者であったことから、それぞれの思いに重ねながら考えようとした結果とも言えるだろう。

今回の試みを足がかりとして、当面、この枠組みでの「關係」概念の明確化、その「關係」に接近する、あるいは記

述する方法論の検討といったことが課題となろう。子どもと関わり手の間に起きていること、生じていることに具体的にどのようにアプローチできるのか実践的な討論の蓄積が必要であろう。

#### 4. 第39回大会報告

##### サブテーマ

コミュニケーション障害研究・実践における「関係」の意味を探る

##### 企画・司会

牧野泰美(国立特殊教育総合研究所)

松村勸由(国立特殊教育総合研究所)

##### 話題提供者

牧野泰美(国立特殊教育総合研究所)

松村勸由(国立特殊教育総合研究所)

青山新吾(備前市立伊部小学校)

##### 指定討論者

原 広治(島根大学大学院教育学研究科/島根県立松江ろう学校)

##### 4-1. 目的

子どもの言語・コミュニケーションに関する領域の中で、いわゆる関係ということ及びその重要性は、従来より多くの研究者や臨床家によって語られてきているが、それぞれに語られる関係の意味は異なったものである可能性が高いことから、第38回大会において、『臨床家が大切にしている「関係」とは』というサブテーマを掲げ、本企画の「その1」を行った。そこでは3名の臨床家からの、各々が大切にしているあるいは目指している「関係」について、話題提供をもとに、「関係」の捉え方、「関係」への援助のありようを議論し、いくつかの課題が整理されたが、「関係」概念の明確化に向けては、議論の出発点を探ったというのが実状であった。そこで今回は、『コミュニケーション障害研究・実践における「関係」の意味を探る』というサブテーマを掲げ、「関係」により接近するための糸口を探ることを目的とした。

##### 4-2. 話題提供の概要

まず、企画者による、趣旨及び目的、前回の概要、「関係」へのアプローチに関する展望・課題の解説があり、その後3名が話題提供を行った。概要は以下の通りである。

1) 牧野泰美: 関係をどのように捉えているかということについて行った臨床家(ことばの教室教師)に対するアンケートからは、1)「関係」を指導を行うために必要なこととする(例えば、レポート、信頼関係、等の表記に代表される)、いわば「前提としての関係」、2)「関係」自体

を指導の目的の一つとする(例えば、コミュニケーション、分かり合い、等の表記に代表される)、いわば「目的としての関係」、3)二者間のありようとする(例えば、向き合い様、見合い様、つながり様、かかわりのあり様といった表記に代表される)、「状況・状態としての関係」、の概ね三つの観点からの捉え方が見られたことを報告した。また、回答の中には、関係の対象(例えば、子ども、保護者、学級担任、等)に関する記述、どのような関係を望むか(何でも言える関係、共感できる関係、等)といった観点からの記述も多く見られたことを補足した。さらに、こうした「関係」にアプローチする場合、何を「関係」研究の資料とするかということに関して、コミュニケーション障害研究における関係論的なアプローチの概観から、今のところ、1)関係を構成する人(子ども、関わり手、等)の内面に映じたもの、2)関係を構成するヒト・モノ・コトに対する第三者に観察されたもの(第三者の目に見えた状況、あるいは内面に映じたもの)、といったことが挙げられることに触れた。

2) 松村勸由: 自身のことばの教室担当者時代の経験、及びこれまで進めてきた研究の中から、コミュニケーション障害、関係についての捉え方を述べた。コミュニケーション障害は、送り手、受け手の双方に発音、流暢性、語彙、構文力等々の言語力が備わっていても生じうる問題で、基本的には関わり手の側が内面に抱く関わりにくさ、通じにくさの問題であることを主張した。従って、コミュニケーション障害は関係の障害と考えられ、その改善に向けては、関わり手の側の内面を捉えることが重要であると報告した。取り組みとしては、関係障害が生じている構造を、関わり手の子どもや周囲の見方を検討することを通して整理し、その構造に応じて、関わり手の内面や両者を取り巻く環境を操作することの必要性を述べた。これらのことから、「関係」は関わる側の内面に映じたものとして捉えることが可能であるとし、対象を意識したときに関わり手の内面に生じるものであるとの捉え方を提供した。

3) 青山新吾氏: 自身のことばの教室での実践を振り返り、「関係」への立ち向かい方について、子どもと通じ合うことを目標に実践してきたいくつかの事例を通して報告した。まず、その時々の子どもの関わりにおいて、子どもと「同じこと」を考えている時は、関わりに苦しさを感じないとの振り返りから、子どもとの共感の成立、すなわち二者間の内面世界の重なり的重要性を述べ、それが子どもの言語発達に影響していることの可能性に触れた。そこから、二者の内面世界に位置付くもの、及びその重なりに関する丹念な考察の必要性を主張した。また、関わり手自身の子どもの見方、さらには、子どもの自己観に踏み込んだ考察の必要性にも言及した。以上から、関わり手には、自

身の内面を見つめ直す、内面を省察するという作業が常に要求されるとした。

#### 4-3. 討論 (印象も含めて)

まず、指定討論者の原広治氏が、三名の話題提供を踏まえながら、自ら行っている地域療育活動を紹介した。その中で、①障害のある子ども、及びその家族を支えていくために、様々な人との関係をつないでいくことが大切であること、②特段に意図しないところから始まった関係が結果的に支えとなっていること、③関係の深まり、分かり合いのためには、共に過ごす、その人やその家族に(体感的に)なってみるといった関わりのありようが重要であること、等、地域療育活動を通して得られた「関係」についての見解に触れた。その後残された時間で、フロアーも交えた質疑・討論を行った。フロアーからは、「関係」の重要性に関する意見が述べられる一方、その関係の状況をどのように評価するのか、あるいは、関係を深めていくためのプログラムは考えられるのか、といった質問がなされた。それに対して、企画者からは、今のところ関係障害が生じる構造や、その改善に向けての内面操作の視点、等についてはある程度整理されてきているが、プログラムという形になる性質のものとは考えにくいこと、また、関係記述や評価のありようは、検討すべき課題となっていることを述べた。

また、今後の議論の深まりに向けては、構音指導等の対症療法的な側面と、関係への援助という側面を整理して語る必要があるというフロアーからの意見もあった。

全体的な印象として、今回の話題提供と討論から、「関係」の切り口は決して一つではなく、まず、それぞれの切り口を整理していくことの必要性が感じられた。また、この企画は、関係を深めることと個の(言語)能力との関連の追求を一つの目標に掲げているが、そこに向かうための足固めとして、子どもと関わり手等、二者の関係における間主観性の問題に関する討論を、充分積み重ねていくことの必要性もうかがわれた。

今回、この企画に対し、準備委員会に用意していただいた会場は大変広い教室で、心配もあったが、予想を超える70名ほどの参加があり、臨床・研究活動を通して「関係」について何かしらの課題意識を抱えている方々が多いことを改めて実感した。その課題意識を充分に交換し合う機会・場を確保することの必要性を認識した時間でもあった。そうした機会・場の蓄積が、この企画が目指す課題への接近に向けて、多くの示唆をもたらすものと考えている。

最後に、この企画に参加された多くの方々、また、運営を支えていただいた方々に心から感謝を申し上げ稿をとじる。

(牧野泰美)